

文武学校

文武学校は、安政2年（1855）に松代藩が藩士の子弟の教育のために建てた藩校です。

安政2年と言えば、ペリーが軍艦4隻を率いて浦賀にやってきたときから2年後です。日本中が4隻の黒船に右往左往する中、8代藩主幸貫や佐久間象山などの優れた先覚者たちの世界的視野に立っ



て日本の将来を考えた開校でした。しかし、当時の松代藩は、善光寺大地震（1847）の復旧工事、江戸城の西の丸の火事の負担金の支出、松代城の横にあった花の丸御殿の火事などで、財政的に窮乏の中での開校でした。それだけに文武学校へかけた期待は大きかったのです。

文武学校の教育で目指したものは、その名のごとく文武両道を兼備した武士道の育成でした。全国に254の藩校がありましたが、文武学校という名がつけられていたのは、松代藩だけでした。武芸を第一として武勇の誉れ高い真田氏の流れを受け継いだ松代藩は、その初めから武芸を大変重んじていました。しかし、文武学校では「四書の大義に通ずるものは、武術の免許以上に当る。」くらい「文」を重視して、八歳で入学して十四歳までは文学を中心に習得させました。また、佐久間象山は、藩主幸貫への書面で次のように述べていました。

「御内々申上候書取 文武両道の偏廢すべからざる事をば古人も既に鳥の両翼車の両輪にも譬へ候て皆人よく知る所に御座候乍然又乱れたる世には武を以て先とし治まれる世には文を以て先と仕候名言も御座候……猶遺憾に奉存候義は是迄度々被仰出候義も総て武の末技のみにて干今一度も文教の御沙汰無御座候事古人翼輪の輪とも符号不仕治世文を先と仕候教にも相当不仕候事如何なる御趣意にや候らむと不審仕候ものも往々御座候歟に承及び候」

一方、文武学校を作るときの学校係の任についた長谷川昭道はその書「深憂狂語」の中で、

「吾が国上下仏像を拝す。これも亦異邦の人なりと雖も、士君子の大道を修むる大道場に安置して之を拝するにあらず。又其拝する所以の意味尤も異なり。故に、仏を寺

閣に拝し、家廟に拝する如きは、頗る怒する所あり。孔孟の徒を安置して、之を学校に拝せしむるは怒すべからざる所の事なり」

といて、松代の文武学校には孔子を祭る孔子廟を作りませんでした。また、文武両道については、

「夫れ武は天地の義心より生じ、勇に依って行はれ、仁を以て成るものなり。故に其終り不殺に帰す。天朝武を以て国を建つる所以のものは是なり。文は天地の仁心より生じ、礼に依て行はれ、義を以て成るものなり。故に其終り条理立て、而して上下の分定まる。是れ我が国脈無窮に垂るる所以なり。文武一を用ゆれば、共に天下平かなりと雖も、武に偏なれば、或は威力に任じて、人心服せず。文に偏なれば、或は、弱に流れて、国勢振はず、共に廢亡を招くの道なり。真文内に行はれ、神武外に挙ぐ。是れ吾、神聖、天地を経緯し、万世を綱紀し、邦徳宇宙に冠絶するゆえんなるかな。故に文も武もなければ立たず、武も文なければ行はれず。国にして文武を具えずんばあるべけんや。人も文無ければ暴、武なければ弱、士にして文武を具へずんばあるべけんや。故に古は必ず文武を兼ね。宮も亦文武を兼ね。是れ治道盛んに風俗美はしきゆえんなり。文武兼備へて、而して大道たつ」と述べて、文武両道の重要さを説いていました。

こうして建てられた文武学校の教育内容は、賞と罰とを明白にしたきびしいものでした。「春秋試験法」では、学習結果を試験し、合格しない者は再試験を行ったりしました。子どもの成績によっては、親の俸禄にも影響を与えました。その結果、四書五経の素読及び四書講義済の人員は年毎に増加していきました。

ところで、政権が徳川幕府から明治政府に移った明治元年（1868）には、幕府の家臣武田斐三郎（フランスの兵制に詳しい）を招き、兵制士官学校を文武学校の中に併設することを決め、明治2年1月から授業が始められました。生徒は文武学校に通う者の中から、優秀な少年が選ばれ、学費は藩が出しました。生徒は多くて72人位でした。一年の授業が終わる頃には、「士官学校書生段々御趣意相わきまえ、ことの外勉強進業仕り、最早文典も卒業の場合に至り候に付、此上は原書に取掛候順序に相運候」と評価されるほど、その学習ぶりは熱心でした。この時買った原書は200数十冊でした。この兵制士官学校で学んだ人々が、後になって日本を代表するような人物に育っていきました。

しかし、この兵制士官学校も明治3年11月に起こった藩札騒動のために閉校せざるを得なくなりました。兵制士官学校が閉校になり、武田斐三郎も松代を去った明治4年1月に、改めて文武学校内に西洋兵学寮士官学校を開校しました。ここでも西洋の学問を教え、フランスの兵式訓練をしました。

生徒は八歳から三十歳までの武士の子弟を一人残らず入学させました。足軽の子どもでも学びたいという意欲のある人はどんどん入学させました。毎日の生徒数は、文武学校も合わせて、多いときは千人、少ないときでも七百人を下らなかったということです。

ところが、西洋兵学寮士官学校も明治4年7月の廃藩で9月には廃校となりました。明治6年の新学制により第54番小学校として松代小学校が文武学校の建物を使って開校されました。

明治22年の町村制実施にともない、東条、西条学校が独立し、松代尋常小学校として再出発し、現在の松代小学校と同じ学区の小学校となりました。

昭和35年に管理校舎が建てられるまで、御役所内に職員室を設けるなど文武学校の建物を中心にして、いくつかの校舎を建てて松代小学校として発展してきました。

しかし、昭和28年に、旧藩校として文部省から史跡の指定を受けてからは、順次文武学校と松代小学校の分離が始まりました。昭和48年に「史跡旧文武学校」の全面修復工事を始めてからは、松代小学校の校舎としては使われなくなりました。

全国の藩校の中でも、今なお完全に近い形で残っているのは松代の文武学校が一番だということであり、変動の激しかった150年余の歴史の中にあって、これは大変貴重なことです。その陰には、文武学校保存のために、幾度となく起こった改築の話を中止させてきた、長岡助治郎先生をはじめとした多くの松代町民の熱意があるのです。現在の松代小学校の教育の根底には、文武学校建学の精神が今も脈々と生きています。